



United Nations
Educational, Scientific and
Cultural Organization



Izu Peninsula
UNESCO
Global Geopark

Progress report 2017 – 2020 進捗状況報告2017-2020

伊豆半島ユネスコ世界ジオパーク
日本

報告書責任者：金刺重哉

A. 基本情報

面積 km ²	2,027 km ² (うち陸域 1,585 km ²)
人口	667,234 人 (2019 年 4 月現在)
ユネスコ世界ジオパーク認定年	2018 年
GGN 加盟年	2018 年
以前の審査日程および審査員名	2017 年 7 月 25 日～27 日 Ibrahim Komoo ・ Alexandru Andrasanu
連絡先 (氏名、職務上の肩書、メール)	金刺重哉 事務局長 info@izugeopark.org
ウェブサイト (URL を記載)	https://izugeopark.org/
ソーシャルメディア (すべて列記)	Twitter https://twitter.com/izugeo Facebook https://www.facebook.com/izugeopark/ Instagram https://www.instagram.com/izugeopark/ YouTube https://www.youtube.com/user/izugeo/

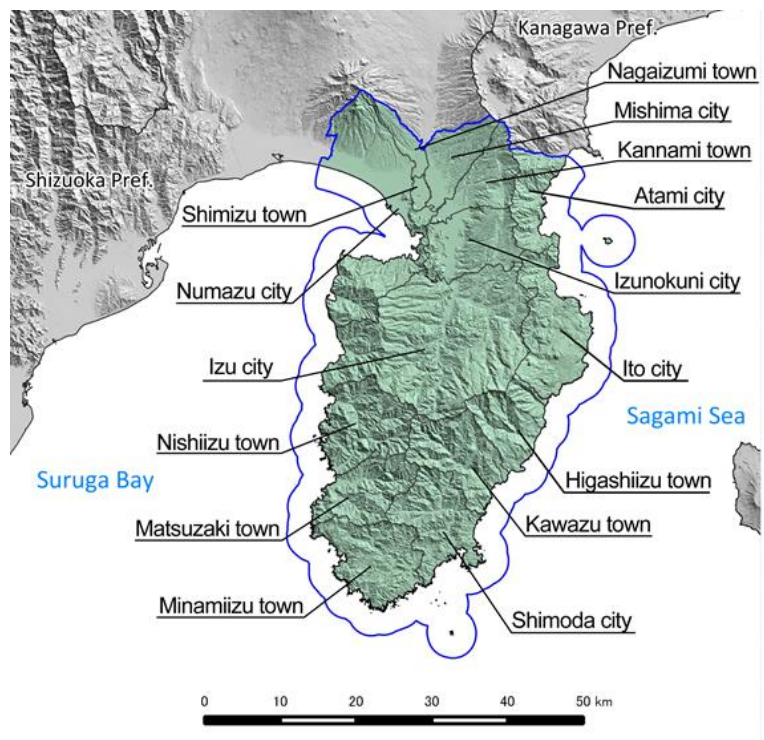
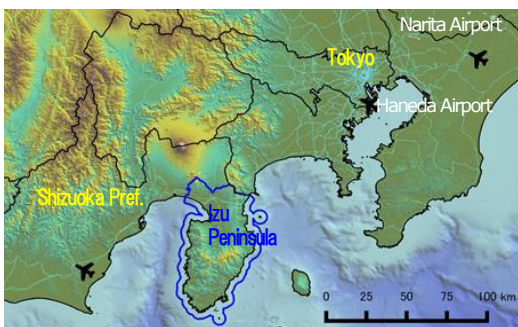
B. UGGp の提出書類一覧

- 進捗状況報告 2017-2020
- 自己評価表 A
- 自己評価表 B
- 添付付属書 (Annex Appendix ; 英文)
- GGN annual report 2018
- GGN annual report 2019

C. 地域の地図



この地図は国連標準地図としてユネスコ公式ウェブサイトからダウンロードしたものであって、本邦政府の立場を表すものではない。



D. 前回の指摘事項に関する取組・改善点

2018年ユネスコ世界ジオパーク新規認定審査

指摘事項 a : Considering the internationally important geological heritage of the Izu Peninsula and the role that it has played in local identity development, specific activities need to be developed in order to identify the connections between the local geological heritage, natural heritage, and cultural heritage and to integrate the results in education, promotion, interpretation and visiting infrastructure.
 伊豆半島の国際的に重要な地質遺産と地域のアイデンティティ形成への役割を考慮すると、地域の地質遺産と自然遺産、文化遺産との関連を明示するため、そして教育、振興、解説、観光インフラによって得られた成果を統合するため、具体的な取り組みを実践することが必要です。

改善点：具体的な実践は小規模多頻度のイベント開催や教育、観光開発として取り組んでいる。その具体的な実践例には下記のものがある。

- ・ジオカフェ：ゲストスピーカーを招いてのトークイベント。伊豆半島のなりたち、自然、文化の関係性を特定トピックについて紹介し、話し合う（E1.5で詳述）。
- ・地質のみならず植生などの自然や文化、文学をハイキングしながらセルフガイドツアーで巡ることができる「フットパスマップ」日本語版、英語版の2言語で伊豆半島の4トレイルを作成、配布。
- ・推進協議会教育部会がESD活動支援センターの地域ESD活動推進拠点として登録され、ジオパーク教育およびESD教育を推進している。

指摘事項 b : Highlight and promote the international value of the geological heritage through effective interpretation for a wide audience at every possible opportunity.
 あらゆる機会を利用し、様々な訪問客に効果的な解説を行い、地質遺産の国際的な価値を強調し、普及して下さい。

改善点：拠点施設、解説板、出版物、ウェブサイト、ジオツアーなど、さまざまな手段を用いて地質遺産の国際的な価値を伝えている（E.1で詳述）。

指摘事項 c : Related with its historical and cultural importance of Izu Peninsula, a deeper investigation should be opened on the intangible heritage of this area. This should include an inventory that includes local tales, legends, myths, local songs, dance, and music.

伊豆半島の歴史的、文化的な重要性に関連して、この地域の無形遺産について詳細に調査し、成果を公開するべきです。これには、地元の物語、伝説、神話、民謡、舞踏、音楽の目録が含まれるべきです。

改善点：指定文化財（無形を含む）目録を作成した。伊豆を代表する文学作品である川端康成（ノーベル文学賞受賞）著「伊豆序説」を用いて、語り手による朗読のもと伊豆半島を総合的、俯瞰的に紹介するDVD作品を制作した。特に地域学習に供し管内すべての学校に配布したほか、広く利用されている。

指摘事項 d : A clear partnership strategy should be developed with partners to include a clear methodology on the criteria required to become a partner and a formal agreement with the Geopark. This is applicable to but not restricted to accommodation and catering providers, transport providers, activity providers and producers of local products.

ジオパークのパートナーとなるために必要な基準に関する明確な方法と、ジオパークとパートナー間の正式な協約を含む明確なパートナーシップ戦略をパートナーとともに構築して下さい。対象は宿泊業と飲食業、交通事業者、アクティビティ事業者および地場製品の生産者を含みますが、これらに限られません。

改善点：伊豆半島の活性化、振興に資し併せてSDGsを達成することを目的に、地域のガス会社との間で包括的な連携協定を締結した。伊豆半島の食材や食文化の理解促進、地産地消の推進、環境理解と防災の普及、地域経済の向上を共同で取り組む（詳細はE7.2を参照）。裾野の広がり期待できることから、パートナーシップ戦略は地域への波及効果にもとづいて現在は個別協定を採っている。また協議会では応援会員制度がある。ジオパークの趣旨に賛同していることが基準で、持続可能な伊豆半島を作り上げることが活動目的である。ここに所属する企業・団体とは実質的パートナーとして位置付けている。このほかエコツーリズム推進全体構想の策定に取り組み、サステイナブルツーリズムを推進する事業者やジオガイドのアクティビティを予約できるポータルサイトの準備を進めている。

指摘事項 e : Develop the different landscapes of the area with the same quality criteria used, in order to have a good balance between the coastal areas and the inland areas, in order to integrate all geopark communities. Ensure that formal agreements are in place with all partners. 地域と内陸地域の良質な均衡を図るため、またジオパーク内のすべての地域コミュニティを統合するため、同一基準を適用してジオパーク内の多様な景観を取り扱ってください。すべてのパートナーと正式な協約を確保して下さい。

改善点：景観についてはサイト一覧及び天然記念物目録、文化財目録を作成した。解説板やウェブサイト、ジオツアーに反映させている。またエリア内で重複する他の世界認証プログラムとの協力を推進し、景観の総合的な解説に努めている。これらは特に内陸エリアで重点的に実施した。パートナーの在り方については指摘事項dを参照のこと。

指摘事項 f : Due to the exceptional historical art and literature found in the Izu Peninsula landscapes, an inventory of these should be created to ensure that they are recorded and put to future use.

伊豆半島の景観に見いだされた優れた歴史的な芸術作品や文学作品があるので、それらの記録を残し、将来利用するために、それら芸術作品や文学作品の目録を整備すべきです。

改善点：文学作品目録を作成した。住民とのトークイベントである「ジオカフェ」では、文学作品をテーマに扱いながら伊豆の風土や歴史を掘り下げる「文豪カフェ」を開催しており、地域の文学館との協働も実現した。

指摘事項 g : Develop international cooperation and exchanges in order to promote local geological, natural and human values and to enhance the role of the geopark in socio-economic development of local communities.

地域の地質、自然、文化の価値を広めるため、また地域コミュニティの社会経済開発におけるジオパークの役割を強化するためにも、国際的な協力や交流を進めてください。

改善点：2019 年秋にチレトゥー-パラブハンラトゥジオパークと覚書を結び、教育および振興分野での協力を実施している。研究者間交流および技術移転のための研修の実施、拠点施設での展示解説コーナーを設置した。今後も相互交流を拡大し、地域コミュニティの社会経済開発を強化していく。

指摘事項 h : Adapt the Master Plan and Action Plan in order to better integrate the recommendations.

この勧告をよりよい形で反映した基本計画と行動計画を作成してください。

改善点：ワークショップをはじめとした草の根レベルの地域住民の視点に立脚した基本計画（2021-2025）および行動計画（2021-2025）を策定している。両計画は 2020 年度内に策定し、その後の推進協議会総会をもって施行する。

指摘事項 i : Strengthen the networking with other UNESCO Global Geoparks at a regional, national and global level, and actively contribute to international conferences and meetings on UNESCO Global Geoparks.

地域、国家、世界レベルで他のユネスコ世界ジオパークとのネットワーク強化に努めてください。そして、ユネスコ世界ジオパークの国際会議や会合に積極的に貢献して下さい。

改善点：ジオパークネットワークを強化するために、国際会議での口頭発表をはじめユネスコ主催研修会講師、ジオパーク現地審査員などを通じて知識と実践を共有し、ネットワークに寄与している。また、チレトゥー-パラブハンラトゥジオパークと協力協定を締結。世界各地のジオパークとは教育旅行の受入れ、リーフレット翻訳、展示用標本の交換、研修会への講師派遣、アジアのジオパーク未実装地域への普及活動を実施、国際連携に貢献している。

その他の指摘 : All UNESCO Global Geoparks should ensure the role of women within the UNESCO Global Geopark staff in accordance with the UNESCO principles.

全てのユネスコ世界ジオパークは、ユネスコの理念に基づき、ユネスコ世界ジオパーク従事者の中における女性の役割の向上に努めなければなりません。

改善点：事務局職員は毎年交代している。進捗報告期間において女性がほぼ半数を占めたこともあるが、2020 年 12 月時点では事務局職員 10 名中 2 名が女性である。構成市町には女性の派遣考慮を要請している。事務局内での多様な視点を確保し、意思決定に反映させる。役割についてジェンダーギャップはない。

E.ユネスコ世界ジオパーク基準の検証

E.1 領域

E.1.1 地形地質遺産および保全

地形地質の国際的な価値

伊豆半島の地質的特徴は、フィリピン海プレート上の海底火山の北上と日本列島への衝突と、その後も継続する火山活動および地殻変動にある。本地域は、活動的火山弧どうしが現在も衝突している世界で唯一の場所で、海底火山の誕生、その後の陸上大型火山、現在も続く単成火山群の活動など多様な火山活動をたどることができる。とくに伊豆半島の西部から南部は海底火山噴出物の露出が良好で、世界の海底火山研究をけん引してきた。衝突による地殻変動は変動地形をつくり出し、1930 年北伊豆地震を起因する丹那断層は活断層研究を推進してきた。

地形地質サイトの保全

主な保全活動事例

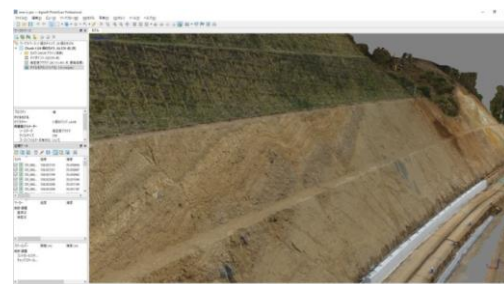
○エコツーリズム推進全体構想の策定

ジオサイトの多くは自然公園法や文化財保護法・条例、海岸保全基本計画、地域森林計画などの各種法令によって保全が図られている。一方、法的保全がなく地域の取り組みによって実質的な保全が行われているサイトもある。現在、エコツーリズム推進法にもとづいてジオパーク地域全体を対象にした「エコツーリズム推進全体構想」の策定に取り組んでいる。本構想ではすべてのサイトを自然観光資源として位置付けている。観光旅行者等によってサイト損壊の恐れがある場合、保護を実施するために自

然観光資源を特定自然観光資源に指定し、本構想が同法にもとづき国からの認定を受けた場合、市町長によって立入制限等の法的規制ができるようになる。

○失われる露頭の保全

工事にともない良好な状態の露頭の出現がある。貴重な露頭では学術的な価値も有するが、工事の進行によって消失してしまう。土木職員に向けたジオパーク研修の成果として、自治体から露頭出現の情報がもたらされる。地質学的な記載や試料採取、ドローンを用いた三次元データの作成、剥ぎ取り標本の作製と保存を行い、失われる露頭情報を保存している。剥ぎ取り標本は地域の学校に教材として寄贈することもある。



ドローン写真から作成した三次元データ

サイトの見直し

過去の現地審査員の指摘にもとづいて「サイト」のみでジオパークの資産を整理した。サイトは、「ジオサイト (Geological site)」「生態サイト (Ecological site)」「文化サイト (Cultural site)」を基本とし、伊豆半島の特徴を踏まえるとこの区分だけでは整理しきれないため、「眺望」「災害」「研究」の3つのサイト種を加えた。

ジオサイト	: 地学/地形学的価値を主とするサイト。
生態サイト	: 生物学的価値を主とする場所 植物群落など 必ずしも地形地質と関連しないものも含む
文化サイト	: 文化的価値を主とする場所 寺社仏閣・景観など 必ずしも地形地質と関連しないものも含む。
眺望サイト	: その場所そのものに特別な価値はないが、眺望地点として価値のある場所。
災害サイト	: 災害に関連した場所 災害遺構や災害記念碑、防災施設など
研究サイト	: 学術的価値を有するが、通常アクセスや理解が困難な場所。原則的に公開しない。
ひとつのサイトが上記区分の複数種を有する場合もある（「複合サイト」）。	

サイト種別	サイト数	
ジオサイト	94	
文化サイト	18	
生態サイト	5	
眺望サイト	13	
災害サイト	13	
研究サイト	93	
複合サイト	地質/災害	1
	地質/生態	12
	地質/生態/文化	1
	地質/生態/文化/災害	1
	地質/生態/文化/眺望	1
	地質/眺望	1
	地質/文化	11
	眺望/生態	1
	眺望/文化	1
文化/災害/眺望	1	

計 268

「地質」を含むサイト(いわゆるジオサイト) 計 122

サイトは、GIS データベースとして整理するとともに、関係団体等が閲覧できるようにしている。

最新版のサイト地図および一覧表、GIS データのダウンロードは、
<http://izugeopark.org/office//maps/geosite/>
 からできる。

E.1.2 境界線

伊豆半島ジオパークの境界線は、15の構成自治体（沼津市、熱海市、三島市、伊東市、下田市、伊豆市、伊豆の国市、東伊豆町、河津町、南伊豆町、松崎町、西伊豆町、函南町、清水町、長泉町）の外縁を基本とし、海域については海岸線から3kmまでを範囲として設定している。これにより有人島である初島（熱海市）や最南端の神子元島（下田市）までを含む範囲となっている。

E.1.3 可視性（ビジビリティ）

入り口機能の強化

伊豆半島ジオパークへアクセスした訪問者に対し、ジオパークを訪問したことを認識したことを容易に認識できるよう、総合案内板等の設置を進めている。とりわけゲートウェイである三島駅前に総合案内板を設置した。車でのゲートウェイとなる道の駅、ゲートウェイ函南（2017年オープン；函南町）にはビジターセンターを、道の駅伊豆月ヶ瀬（2019年オープン；伊豆市）には総合案内板を新規に設置した。そのほかの道の駅や鉄道駅にはビジターセンターや総合案内板が設置済みである。このほかロータリークラブの協力で、メインルートの国道135号線や道の駅にウェルカムサインを設置している。今後も東京方面からのゲートウェイには視認性を向上させる「ウェルカムサイン」を設置する。



道の駅伊豆ゲートウェイ函南内の
ビジターセンター

解説板の整備

2017年以降、4年間で25カ所にジオパークの解説板を設置した。解説板はすべて日本語、英語を併記し、写真やイラスト、地図を有効に使い、文章量も限定して理解しやすいように工夫している。これまでに設置した解説板は141カ所ある。解説板はウェブサイトでも閲覧できる。2018年の世界認定後、推進協議会は既存解説にユネスコロゴを表記するよう順次更新している。また、2018年に世界農業遺産「静岡水わさびの伝統栽培」に認定されたわさび栽培地のうち、ジオサイト、生態サイトとも重複している地点に世界農業遺産を所管する静岡県と共同で合同解説板を設置し、世界認定ブランドの相乗効果を狙った（E.4で詳述）。



道路脇設置の
ウェルカムサイン

ウェブサイト・SNS

伊豆半島ジオパークのウェブサイトを2017年度に大規模に改修した。新しいウェブサイトは、ジオパークの基本情報やみどころ、アクティビティの紹介、イベント情報、各種資料のダウンロードの基本機能を有する。サイトの特徴は見どころを個別に紹介するのではなく、地域や観察できる現象、テーマ、地質時代などによってタグ付けされ、閲覧者の興味関心によって複数のみどころを次々に閲覧できる。各みどころ紹介のページには、解説やアクセス情報に加え、安全に見学するための「危険情報」や、より詳細な情報を求める方向けの「学術情報（そのサイトを対象とした論文の紹介）」も掲載している。また台風などの災害時にはサイトの被害状況も提供している（E2.4で詳述）。

ウェブサイトには1日あたり平均1000ユーザー程度の訪問がある。静岡県内の観光関連サイトの中でも上位のトラフィックを獲得しており、ジオパークの普及や訪問客誘致に繋がっている。SNSはtwitter、Facebook、Instagram、YouTubeを運用しており、イベントの実況や時事マターなど、ウェブサイトより身近でタイムリーな話題提供を行っている。

E.1.4 施設・インフラ整備

伊豆半島ジオパークミュージアム「ジオリア」

伊豆半島ジオパークの活動拠点として、2016年4月に伊豆半島ジオパークミュージアム「ジオリア」を設置した。設置にあたっては、自治体、ジオガイド、地元（修善寺温泉）を対象にワークショップを行い次のコンセプトを固めた。

『来館者が楽しみながらジオストーリーを体感できることを目的とし、科学者が研究の中でみつけた発見やそこに至るプロセスを来訪者が追体験することにより、来館者が現在の伊豆半島や地球活動をひも解くことができるように演出する。また、そうした体験をもってジオパークのサイトを訪れることで、解説板の助けを得ながら、自ら風景を読み解くことができるようになることもねらう。』

ジオリアでは展示物の多くを直接触れられるようにしており、顕微鏡で自由に観察もできる。展示では企画展を定期的で開催し、リピーターにも新しい情報を提供している。ジオリアでは展示だけな

く、子ども向け、大人向けのワークショップを随時開催し、身近な自然現象の理解や発見に貢献している。

ジオパークビジターセンター

伊豆半島地域は訪問者の入り口が複数ある。また、ジオパークのサイトや宿泊施設もエリア内の広い範囲に分布している。こうした事情から、拠点施設である「ジオリア」だけでは必要な情報を伝えきれない。そこで、原則として各市町（計 15 市町）に 1 か所ずつ、周辺エリアの情報提供を目的とするビジターセンターを設置している。2017 年以降の新設は 2017 年に函南町、2019 年に南伊豆町、清水町、2020 年に西伊豆町のビジターセンターである。ビジターセンターは現在までに 15 か所が設置され、各市町が管理している。

研究拠点施設「あまじお」

研究施設として天城研究拠点「あまじお」を 2019 年に設置した。研究員用の研究室のほか、試料保管室、成果物の展示室がある。同施設には静岡大学も入居しており、大学との共同イベントも開催した。

E.1.5 情報、教育、研究

普及媒体

○推進協議会が制作/監修したもの

推進協議会では訪問者や地域住民に向け、伊豆半島の成り立ちや主要サイトを自然・食・歴史などと併せて紹介する「伊豆ジオマップ」を 5 言語（日本語・英語・簡体字・繁体字・韓国語）で、また訪問客をターゲットに東西南北 4 エリアごとの「ドライブマップ」を作成している。これら地図類について、ジオガイドと協力し内容を随時更新してビジターセンターや道の駅、観光・宿泊施設で配布しており、ジオパークの認知向上の強力なツールになっている。

このほか、地質や植生などの自然や文学をハイキングしながらセルフガイドツアーで巡ることのできる「フットパスマップ」を作成した。加えてマリンアクティビティ事業者との協働で、上述の伊豆ジオマップについて海域を対象として海の中のジオを紹介する「伊豆海ジオマップ」を作成した。これらのアクティビティマップは日本語・英語の 2 言語で作成、海外からの訪問者にも伊豆のアクティビティを楽しめるようにしている。

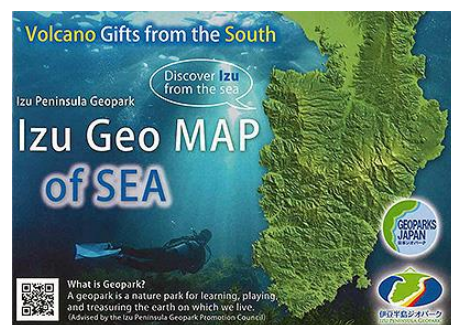
教育用の素材として、児童生徒向けにまんが「伊豆半島のひみつ」を作成、伊豆半島ジオパーク内の小学 5 年生全員を対象に毎年の配布を開始し、ジオパークを活用した学習に用いている。また伊豆を代表する文学作品である川端康成（ノーベル文学賞受賞）著「伊豆序説」を用いて、語り手による朗読のもと伊豆半島を総合的、俯瞰的に紹介する DVD 作品を 2020 年に制作した。特に地域学習に供し、管内すべての学校に配布し、伊豆半島の再理解に広く利用されている。

○書籍

より広範な普及媒体として書籍がある。推進協議会学術顧問の静岡大学小山真人教授によりドローンを用いた空撮写真を使った伊豆半島の地形地質解説「ドローンで迫る 伊豆半島の衝突」が 2017 年に刊行、一般向けの書籍では 2019 年にアトリエ・ロッキー社が、伊豆半島ジオパークのドローン空撮写真集「神々のジオ」を発行した。2020 年には協議会学術顧問である静岡大学災害総合センターが中心と



伊豆半島ジオパークにおける拠点施設の分布（2020 年）



「伊豆序説」DVD の 1 シーン

なって編著した「静岡の大規模自然災害の科学」が出版、多くのページを伊豆半島の事象に割いている。これらの書籍はジオリアのミュージアムショップでも販売している。

○伊豆ジオ検定

印刷・出版物やウェブサイトの情報により多く参照してもらうため、毎年伊豆ジオ検定を実施している。伊豆ジオ検定3級は、受験者が関心を興しながら楽しく調べてもらえるよう期間内に解答する方法を採っている。2020年度までの4年間の平均受験者数は500名。学校や企業での受験もあり、認知度が向上している。さらに3級合格者を対象とした伊豆ジオ検定1・2級も実施している。1・2級検定は試験場で受験する方式で、2019年度までの3年間の平均受験者数は57名である。実際にサイトを訪問したことがあるほど正解しやすい設問にしてある。50点満点中45点以上で1級、35点以上で2級に合格。1級合格者は毎年1～2名程度の難関で、毎年受験し1級をめざす人も少なくない。

マスメディアとの連携

報道機関向けのプレスリリースを戦略的に発出しており、例えば2018年度のプレスリリースは101本で、ユネスコ世界ジオパークの中で世界最多を記録した。現在、リリースする内容に応じて、会員(78団体)、応援会員(150社)、県市町広報担当、報道機関(77社)、旅行会社(51社)、ジオサポーター(230人)、ジオガイド(189人)に情報を発信している。ジオパークに関心のある住民には直接情報が届き、加えて頻度の高いメディアでの報道によってジオパークの認知度は向上している。認知度の向上にしたがってメディアからの出演要請も多数あり、例えばNHKの人気全国番組で伊豆の解説を行った。

ジオカフェ

伊豆半島ジオパークの様々な価値と知識を共有する場を作るための企画である。2017年度に世界のジオパークを知ろうという主旨で初めて開催。2018年度より2か月に1回程度のペースで半島内の各地を会場に、少人数で、文学、生物、地形、民俗などその都度様々なトピックを取り上げ、専門家を交えて情報を共有する取り組みを行ってきた。アンケート結果によると常連客がほぼ半数ながら新規参加者や2度目の参加者も半数を数える。また伊豆の自然と文学作品の関係にせまる「文豪シリーズ」や、温泉の管理や科学に目を向けた「おんせんはたいへんシリーズ(静岡県温泉協会と共催)」など、定番化したテーマもある。



開催日	タイトル	登壇者
2018年 2月12日	気軽にサイエンスカフェ～世界のジオパークってどんなところ？～	新名阿津子(鳥取環境大学) 鈴木雄介 朝日克彦
2018年 6月10日	ジオ文豪カフェ	安藤裕夫(ジオガイド) 長倉一正(書店経営) 鈴木雄介・新名阿津子
2018年 7月7日	天城越え	石上了子(プラタモリディレクター) 宇田倭玖子(白壁荘女将)
2018年 9月16日	結晶のお話と虹の標本作りワークショップ	さとうかよこ(きらら舎)
2019年 1月27日	おんせんはたいへん	太田のりこ(利建ボーリング) 渡邊慎(下賀茂温泉)
2019年 2月24日	ジオ文豪カフェ	剣持直樹(芹沢光治良記念館) 徳山加陽(井上靖文学館) 安藤裕夫(ジオガイド)
2019年 6月16日	ジオカフェ道祖神	田島整(上原美術館) 大坂規久(ジオガイド)
2019年 7月6日	ジオ文豪カフェ「峠の男たち」	徳山加陽(井上靖文学館) 安藤裕夫(ジオガイド)
2019年 9月7日	用水路カフェ in 三島	すみまき(手ぬぐい作家) 鈴木雄介
2019年 11月30日	ちんうずむしと中野先生	中野裕昭 (筑波大学下田臨海実験センター)

2020年 1月26日	おんせんはたいへん	大石栄子 (松崎三浦温泉 株) 江澤雄一 (株 サイエンス) 杉本昭雄 (共立化学工業 株)
2020年 4月25日	おんせんはたいへん (オンライン)	福田青郎 (関西学院大学) 仲田和正 (西伊豆健育会病院)

牛乳小話

2018年夏から函南東部農業協同組合と連携して、200ml入り丹那牛乳のパックにジオ小話を表示する牛乳小話プロジェクトを展開している。200mlパックは年間1000万本以上、主として伊豆地域の学校給食に提供されており、その教育効果は非常に大きい。2019年にスタートした第2版では、70歳以上のシニア層から作品を公募。同時に高齢者施設の希望があればジオガイドが出向いて作品づくりを支援する出前講座の制度も整え、学校だけでなく高齢者の地域学習、ジオパークの啓発普及も意図している。



ジオトレイン

伊豆急行は、鉄道1編成に各地ジオサイトの写真ポスターを展示し、訪問者にジオパークを紹介するジオトレインを継続的に運行している。2019年と2020年には伊豆箱根鉄道も1編成をジオトレインとして運行した。この車両では地元の高校生がジオサイトを題材に制作したステッカーを掲出しており、鉄道会社、高校、推進協議会三者の協力により実現した。



伊豆箱根鉄道ジオトレイン内のポスター（伊豆総合高校写真部制作）とジオトレイン

ジオパーク子ども絵画コンクール

伊豆半島に在学、在住する小・中学生を対象に夏休みを含む時期にジオサイトを描いた絵画作品を募集しコンテストを行っている。ねらいは子供たちが家族でジオサイトを訪問し、ひいては地域を知り、誇りに思う機運醸成にある。2017年度から開始し、年々応募作品は増え、2019年は200点弱が集まった。拠点ミュージアム「ジオリア」のほか、ビジターセンター、協賛企業で巡回展示を行っている。

研究助成

伊豆半島における学術研究の底上げを目指し、2015年度から若手研究者の研究奨励制度を始めた。ユネスコ世界ジオパーク認定を受けた2018年からは方針を変更。世界レベルの研究を奨励して、英文による査読論文刊行を支援する助成へ変更した。また機関研究者に広く周知し先端レベルの応募を増やすことで競争的研究資金へ改変できた。採択者には、研究成果を一般市民に向け専門用語を排除しアウトリーチする視点で成果講演を行っている。世界先端研究の科学普及、地域浸透にも貢献している。

	地球科学 分野	生命科学 分野	人文社会科学 分野
2017年度	2	1	
2018年度	2	2	
2019年度	2	1	
2020年度	1	1	1

過去4年間の「伊豆半島ジオパーク学術研究助成」採択研究分野別件数

E.2 その他の遺産

E.2.1: 自然遺産

伊豆半島には登録されている天然記念物のうち、植生や生態、野生動物について、国指定が 11 件、県指定が 32 件、市町指定が 63 件となっている。

伊豆半島は沿岸を黒潮が流れることから北緯 35 度の緯度としては温暖な気候に恵まれており、例えば南端の石廊崎測候所では年平均気温 16.6℃である（1981-2010 平均）。そのため暖温帯の南方系の植生の北限地になっていることが多い。沼津市の大瀬崎にあるビャクシンは群生地として北限である。このほかにも複数のシダ類の北限地になっている。一方、中央山地の天城山は年降水量 4000 mm に達する多雨地であり、多様な自然環境の源である。この天城山の山稜部のヒメシヤラやブナの森は国立公園の特別保護地区に指定されている。またブナについては函南町の原生林が江戸時代から禁伐の森として保護されてきた。現在より気温が 6~7℃低かった氷河期には寒冷地を好むブナは伊豆半島に広がっていたが、後氷期の気温上昇にしたがって標高 1000m 前後の天城山や函南の森に残された残存種である。

このほか海域にも伊豆の自然の特徴がよく表れており、沼津市の内浦湾はサンゴ（エダミドリイシ）の北限地となっているほか、プレート沈み込み帯の駿河湾には多数の深海魚が生息しており、世界最大の節足動物であるタカアシガニもいる。



大瀬崎のビャクシン



天城山ブナ原生林

E.2.2 文化遺産

伊豆半島には登録されている文化遺産が 669 件あり、うち世界文化遺産 1 件、国指定文化財 142 件、県指定文化財 79 件、市町指定文化財 447 件となっている。

伊豆半島における人々の痕跡は約 3 万 7 千年前の中期旧石器時代に遡る。沼津市の井出丸山遺跡から出土の石器はわが国最古級の石器で、伊豆諸島神津島産の黒曜石を用いており、舟による人の往来の証拠として貴重である。古墳時代の遺跡はサイトに指定している柏谷横穴群、江間横穴群などがある。こののち、平治の乱で伊豆へ配流となった源頼朝の旗揚げや、幕末に日米和親条約の付帯協定である下田条約が締結された伊豆には江戸末期に大砲製造が行われた「葦山反射炉」、わが国初の米国総領事館となった「玉泉寺」など多数の国指定史跡がある。このうち葦山反射炉は世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成資産である。



柏谷横穴群（函南町）

伊豆の歴史、文化で特筆するものとして、伊豆石とその石丁場が挙げられる。硬質で耐久性に優れた安山岩質の「伊豆堅石」は城の石垣に、軟質で軽く加工しやすい凝灰岩質の「伊豆軟石」は石蔵やかまど、屋内の装飾建材として使われている。これら石丁場の中で伊東市宇佐美にある江戸城にかかる石丁場遺跡が市指定史跡になっている。またかつては金をはじめとした鉱物の産出も多く、土肥金山、龕附天正金鉱の鉱山跡も市指定史跡となっている。

E.2.3 無形遺産

伊豆半島には登録されている無形文化財が 58 件あり、うち国指定 1 件、県指定 10 件、市町指定 46 件、国と県の重複指定が 1 件ある。これらは法的な保護を受けた無形文化遺産であり、年中行事や神事、芸能が中心である。伊豆は火山にまつわる土地であり、伊豆一の宮「三嶋大社」（国重要文化財指定）の主祭神である三嶋大明神は、南方の火山島で噴火があるたびに神格が上がった。一方、1958 年の台風で大きな被害を出した狩野川では、毎年 8 月に川の神を鎮め水難者を供養する伝統行事「かわかんじょう」が行われる。また石廊崎の先端に祀られている石室神社など、海上安全の守護神として海の人々に崇拝された神社も多い。



かわかんじょう（伊豆の国市）

○文学者と伊豆

温泉に恵まれた伊豆は文学者らが逗留して作品を執筆してきた地であり、とりわけ近代の文学作品に伊豆が数多く登場する。天城湯ヶ島で育った井上靖（「しろばんば」等）や長期逗留をした川端康成（「伊豆の踊子」等）、熱海や沼津などの旅館で「斜陽」「人間失格」などの著名な作品を執筆した太宰治など、小説、随筆、詩歌など325点の作品を目録化した。2018年度から開始したジオカフェでは、これら著者、作品と伊豆の風土とのかかわりについて語る「文豪カフェ」を開催している（E1.5で詳述）。



『伊豆の踊子』の天城隧道

E.2.4 気候変動および自然災害への関わり

ジオパークの活動を通じて、人々は大地のなり立ちを学ぶことができる。その過程で過去の災害に関する知識や、将来起こり得る災害に備えることもできる。静岡県、伊東市、伊豆市の地域防災計画には「伊豆半島ジオパーク推進協議会と連携し、観光客等に対して火山に関する防災思想と防災対応を広く普及・啓発する」と明記している。伊豆半島ジオパークのサイトには災害サイトとして、災害遺構や記録を設定している。具体的な防災対応としては、新たに伊豆東部火山群火山噴火緊急減災対策砂防計画推進連絡会（2018年設立）にメンバーとして参画している。また自治体の防災職員を対象としたジオパークの災害サイトの視察も実施している。

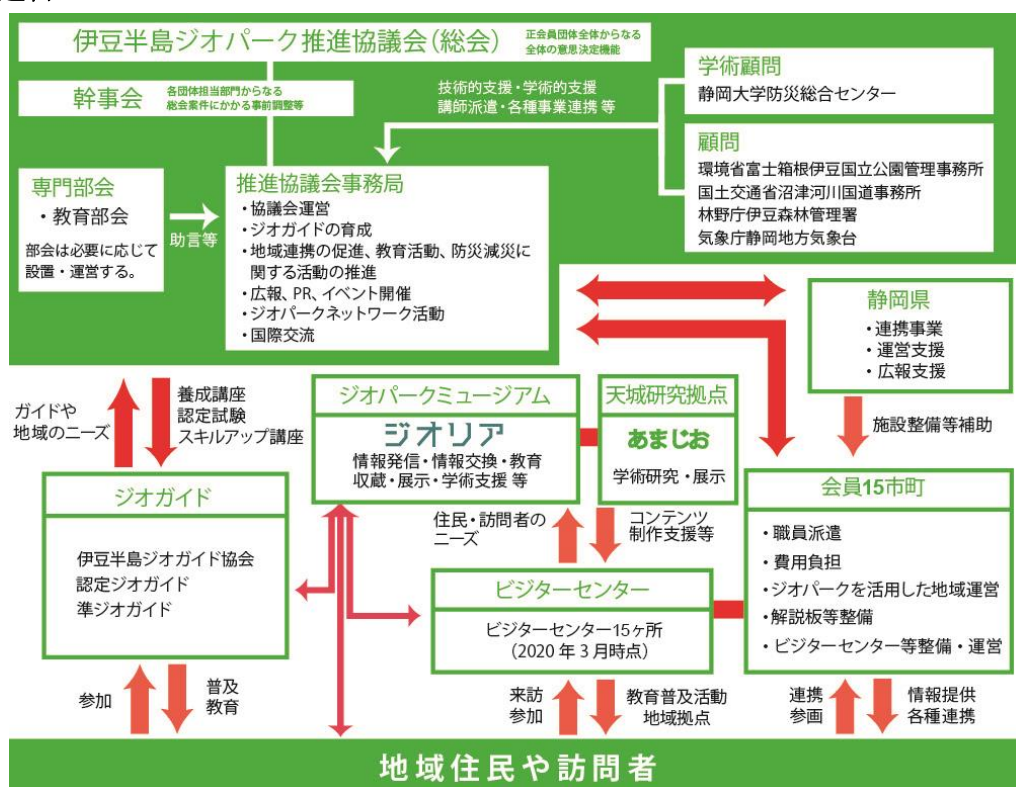
2019年7月19日には、1989年の伊東沖海底噴火から30年の節目であることを踏まえ、災害記憶の継承を目的としたシンポジウムを行った。大学教授による基調講演のほか、当時の噴火を体験した防災担当者や地元漁師、メディアによるパネルディスカッションを行った。シンポジウムには約370名が参加し、災害の忘却、風化を防ぎ、再度の啓発になった。



シンポジウム パネルディスカッション

台風等の自然災害発生時にはSNSで情報発信を行うとともに、発生後には現地調査や市町からの聞き取りを行い、ジオサイトの被災を把握する。情報は随時ウェブサイト等で被災状況の報告を行っている。被災後の復旧工事にあたっては、工事を実施する自治体と推進協議会が協働し、サイトの価値を失わない対応をしている。

E.3 管理運営



伊豆半島ジオパーク推進協議会は、伊豆半島ジオパークの運営組織であり、地方自治体、商工団体、や交通事業者を含む76団体（2020年12月現在）により構成される。推進協議会では、伊豆半島の観光振興を担う「一般社団法人 美しい伊豆創造センター」との統合準備をしており、2022年4月の統合で合意している。新組織は法人格を持った団体となる。

推進協議会は、総会、幹事会、事務局、専門部会よりなる。総会は各団体の代表者により開催し、規約の制定、改廃、事業計画、予算の決定やその他重要事項の審議を行う。幹事会は総会に諮る案件や事業計画を審議し、事務局は具体的な活動とジオパークの窓口機能を担う。こうした活動を専門的見地から補佐する専門部会は必要に応じ設置される。

推進協議会は独立した予算・財務管理を行っている。主な収入は各会員からの会費（主に15の自治体）と県補助金であり、協議会が行うジオガイド養成や広報普及等の事業や研究員の人件費などの運営費に充てられる。また、企業からの寄付を原資とした保全研究基金会計があり、保全活動や研究助成に充てる。ビジターセンターや解説板等のハード整備については各市町や会員団体が予算を担う。2017年以降の推進協議会の予算推移は以下の通り。

推進協議会予算の推移

年度	一般会計予算	備考	保全研究基金
2017年	77,700,000円	ジオリア運営資金を編入、UGGp 審査のための増額 清水町および長泉町からの職員派遣に代わり人件費支出	2,070,000円
2018年	72,591,000円		1,515,000円
2019年	81,494,000円	事務局長人件費を計上	1,301,694円
2020年	81,557,426円		1,500,000円

事務局は、伊豆半島の中央、伊豆市修善寺に設置されており、現在10名の職員で運営されている。事務局では3名の専門家（地質学、自然地理学、人文地理学）を専任研究員として雇用し、ジオパークにおける研究活動を行うとともに、ジオサイトの科学的解釈や解説板製作、教育・普及活動を担当している。外部の専門家として静岡大学小山真人教授を学術顧問に迎え助言を得ているほか、ジオパークにおけるプロジェクトの際に必要なに応じ専門部会を組織する。

進捗報告期間において女性がほぼ半数を占めたこともあるが、2020年12月時点では事務局職員10名中2名が女性である。構成市町には女性の派遣考慮を要請している。事務局内での多様な視点を確保し、意思決定に反映させる。

現在の推進協議会職員表：

	名前	任用	職務	専門	エフォート	性別
1	金刺重哉	正職員	事務局長		100%	男
2	小野英樹	河津町からの出向	事務局長補佐	考古学	100%	男
3	朝日克彦	正職員	国際連携・研究員	自然地理学	100%	男
4	新名阿津子	正職員	ツーリズム・研究員	人文地理学	100%	女
5	遠藤大介	正職員	教育・研究員	地質学	100%	男
6	早川憧	熱海市からの出向	教育		100%	男
7	塚本春菜	南伊豆町からの出向	ジオカフェ・地域連携		100%	女
8	木村寛治	清水町からの出向	庶務全般		100%	男
9	小柴宇一郎	西伊豆町からの出向	広報・企業連携		100%	男
10	太田鉄也	松崎町からの出向	総務経理・ジオリア		100%	男

E.4 重複（オーバーラッピング） 世界遺産

エリア内には世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業（2015年登録）」の構成資産の1つである韮山反射炉がある。韮山反射炉は幕末期に実際に稼働し現存する国内唯一の反射炉（溶解炉）で、炉体には伊豆半島地域で広く利用されている伊豆軟



韮山反射炉（伊豆の国市）

石（凝灰岩）が用いられている。このことから、葦山反射炉を管理する伊豆の国市文化財課と協議のうえ、ジオパークの「文化サイト」として登録し、葦山反射炉ガイダンスセンターにおける「伊豆石」の企画展示を実施した。さらなる協力体制構築、回遊性のある相互誘客など、ユネスコプログラムとしての価値向上に努める。

世界農業遺産

伊豆半島の中央山地、天城山は4000mmを越える年降水があり、豊かな湧き水の源になっている。こうした自然環境を背景に、わさびは伊豆を代表する農産物となっている。130年前に伊豆で開発されたわさび栽培方式は今日までその伝統が継承され、また肥料や農薬をほとんど使わない農法から、2018年に世界農業遺産「静岡水わさびの伝統栽培」に認定された。代表的産地はわさび栽培特有の景観からジオパークの生態サイトに指定している。世界農業遺産を所管する静岡県と共同でユネスコと世界農業機関のロゴが併記された解説板を作成。2つの世界ブランドのシナジー効果とより分かり易い解説の意図はジオツアーの訪問者にも好評である。さらに、生産者向けのワークショップも共同開講した。



伊豆わさびの世界農業遺産とジオパークの共同解説板

E.5 教育活動

学校教育

児童・生徒たちが暮らす地域の自然や歴史、文化を学ぶことを通してふるさとに対する誇りや愛着を育み持続可能な社会を実現するため、伊豆半島ジオパークでは、伊豆半島の学校でジオパークを活用した学習を推進・実施している。2020年度からの新学習指導要領の前文および総則には「持続可能な社会の創り手となる」という記述があり、その準備として教育現場でのESDを支援、推進するため2017年度には小中高校教員および市町教育委員会向けのESD説明会を開催した。翌2018年11月には教育部会がESD活動支援センターの「地域ESD活動推進拠点」に登録した。

ジオパーク学習の実践では、西伊豆町・松崎町では小中高一貫教育のカリキュラムが作成され、伊東市では市域全小学校での予算措置を伴ったジオパーク学習が進められている。これらを先例に他市町にも続々とジオパーク学習が広まっている。具体的には「総合的な学習の時間」を利用し、地域学習として大地の成り立ちや、地域の歴史、自然の特徴を扱うことが多い。このほか理科の単元での地層や火山灰の観察や、防災学習での利用もある。フィールドワークを伴うことも多い。講師は推進協議会の研究員とジオガイド協会のジオガイドとで分担して担っている。推進協議会やジオガイドにより2017年度は30校、2018年度は40校、2019年度は30校の出前授業を実施した。

さらなるジオパーク学習の普及を意図し、教職員がジオパーク学習の必要性や学習できる内容を知らなければジオパーク学習の活用できないことから、教職員向けジオ学習テキストを2019年に作成した。このテキストは、学校周辺のジオサイトや、ジオサイトごとに学べる内容をまとめたものである。テキストは各市町教育委員会および全学校へ配布した。



熱海高校「避難のススメ」

高校での教育にも参画している。科目「課題研究」のうち地学を対象とする生徒には課題を設定して、研究に取り組みさせている。この成果は日本国内の地球惑星科学の学会でポスター発表し、毎年学会賞に浴している。このほかの高校では「総合的な探求の時間」でジオパークの商品開発に取り組み、「理科課題研究」では地震発生時の津波からの避難ワークショップを住民とともに実施した。

ESDの取組方法、SDGsを見据えた学校や地域での課題解決のために、ESDを意識したジオパーク教育を推進していくことが重要であり、人々の生活や文化、歴史、その地域の産物なども含んだ総合的な学習を目指していることを地域に周知し、ジオパークを教育の中でよりよく活用できるよう努めている。また持続可能な教育のためには、ジオガイドや教員が授業を担える組織的な仕組み作りも必要である。

教育通信

学校と連携した活動を中心に、学校や地域における教育活動事例や、ESDや防災学習に関する情報などを掲載した「伊豆半島ジオパーク教育通信」を隔月で発行し、管内全学校に配布している。ジオ学習を積極的に実施しているが、一方で他の学校での取り組み事例を知る機会が乏しく、教育通信によって取り組み事例を共有し、より効果的な教育実践を広める機会になっている。

教育部会

教育活動の方針設定や検証、教育を取り巻く状況の情報収集を行うために2017年より教育部会を設置している。教育部会は教育活動に携わるジオガイドや教員、教育分野の研究者、教育支援機関（ESD活動支援センター、ユネスコ・アジア文化センター）で構成される。当該部会では前述した「ジオ学習テキスト」も作成した。また2017年には、ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施した「インド教職員招へいプログラム」による訪問団を受け入れ、ジオパーク学習をインド教職員に紹介し、伊豆半島の教員との意見交換を通じて、相互理解を促進した。



ガイド養成・スキルアップ支援

ジオガイド養成講座は隔年で実施し、養成講座を行わない年には既存ジオガイドの技術向上のためのスキルアップ講座を行っている。2017年度と2019年度にはジオガイド養成講座、2018年度にはスキルアップ講座を実施した（2020年も実施）。

○ジオガイド養成講座

ジオガイド養成講座は伊豆ジオ検定3級合格を受講条件とし、有料での開講としている。座学と野外研修からなる約5か月の講座終了後には実地試験を経て協議会がジオガイド認定を行う。2019年度までに約200名の認定ジオガイドが誕生した。認定ジオガイドは5年に1回、講習受講を経た更新が必要である。更新手続きにより、ガイド個人の活動実績を推進協議会が把握している。認定ジオガイドの組織「伊豆半島ジオガイド協会」はジオパーク活動を実践する原動力となっており、ジオパーク推進協議会と強力な連携のもと各種活動に就いている。

○スキルアップ講座

ジオガイド養成講座を行わない年については、認定ジオガイドを対象としたスキルアップ講座を実施している。2018年は、ジオガイドのコミュニケーション、解説スキルの向上を目的としてホールアース自然学校を講師に2日間の野外実習を含む5日間の講座を実施した。また、海外からの訪問客対応能力向上のため、文化背景の違いのさらなる理解や語学向上のインバウンド講座や、推進協議会と協力した英語ガイド講習も実施した。

○準ジオガイド

活動エリアが限定的で伊豆半島全体を対象とした長期の養成講座を受講は困難だが、ジオパークに興味を持つ主としてアクティビティ事業者を念頭においた「準ジオガイド」制度を 2013 年度創設した。2018 年と 2020 年には伊豆高原のビジターセンターで活動する「ジオテラス伊東」がジオガイド養成講座を実施した。

E.6 ジオツーリズム

伊豆半島ジオパークでは地質遺産をはじめとする自然環境や地域の歴史、文化を体験して学び、ひいてはそれらの保全につながる観光のあり方を模索している。伊豆半島の基幹産業の 1 つである観光業における持続可能な地域経済を目指し、サステイナブルツーリズムの推進と事業者の連携強化を図ることを目的として 2019 年に「エコツーリズム推進全体構想」を策定した。このエコツーリズム推進全体構想はエコツーリズム推進法にもとづき地域が策定する自然観光資源の保全及び活用のための計画で、主務大臣（環境、国土交通、農林水産、文部科学）が認定する。認定を受けることによって資源の保全を図りつつツーリズムを促進させるためのさまざまな制度を利用することが可能となる。具体的には、アクセスの悪い地域でのツアー実施のためにジオガイドが訪問者を車で運ぶことができる輸送特例や、オーバーツーリズムによる環境悪化を防ぐための立ち入り規制の法制化である。伊豆半島ジオパークでは、地域のサステイナブルツーリズムを推進するための方法として、自治体やアクティビティ事業者によるワークショップやパブリックコメントを経てエコツーリズム推進全体構想を策定してきた。この構想は主務官庁への申請にあたり事前審査を受けている。

サステイナブルツーリズムのプロモーション支援について、当該事業を推進するアクティビティ事業者を対象としたポータルサイトを web 上に用意すべく進めている。ジオガイドツアー、海ジオツアー、e-Bike ツアーといった持続可能な観光を紹介し、実際のツアーを予約できるサイトとする。このほかジオガイド協会では予約を必要としない定時発着のツアーも複数提供するようになった。また香港ジオパークと協力し海外からの教育旅行も誘致し、ジオツーリズムの普及、実装を進めている。

E.7 持続可能な開発&パートナーシップ

E.7.1 持続可能な開発に関する方針

伊豆半島の地域振興、防災、交通基盤などを含めた将来的な地域像を描く、伊豆半島 7 市 6 町首長会議による 2020 年策定版「伊豆半島ランドデザイン」において、伊豆半島ジオパーク推進協議会は伊豆半島における持続可能な開発の役割を担う。

E.7.2 パートナーシップ

推進協議会の制度としてのパートナーシップ

○応援会員制度とサポーター制度

応援会員制度は 2015 年につくられた。応援会員になった事業者・団体は商品等にジオパークのロゴマークを付けることができるインセンティブを与えた。2020 年 3 月末現在の応援会員数は 151 事業者で、年会費は総計約 100 万円。ロゴマークを活用した商品は約 40 点である。事業者の動機や要望は様々であり、丁寧にヒアリングを行って地域のニーズを汲み取っている。サポーターはジオパークに関心のある個人で、推進協議会では応援会員とサポーターに対し毎月「来月のジオ関連イベント情報」を送っているほか、会員に関心のありそうな情報を逐次メールで提供している。また意欲的独創的な取り組みをプレスリリース、推進協議会ウェブサイトを通じて広報している。また取り組み事例を相互に紹介し、新しい事案の萌芽となるよう、2017 年からは「応援会員の集い」を開催、横のつながりを強化している。応援会員のネットワークを構築するとともに、事業者の取り組みが伊豆半島の活性化を励行するよう、様々な要望を聞き取って実装するように模索している。

地域内外の団体とのパートナーシップ

ジオパーク推進協議会は、2020 年、静岡ガスグループとの間で包括的な連携協定を締結した。10 年間の長期パートナーシップにおいて、「自然・文化遺産と関連した地質遺産と人間社会とのつながりを探り、発展させる」とのジオパークの理念に沿う連携事業を推進することで、伊豆半島の活性化、振興

に資し併せて **SDGs** を達成することを目的とする協定である。具体的には、伊豆半島の食材や食文化の理解促進、地産地消の推進、環境理解と防災の普及、地域経済の向上を共同で取り組み、伊豆半島の価値の創造を行うものである。まずその端緒として、一般市民向けに伊豆の代表特産物、わさびを題材とした料理教室を兼ねたワークショップを行い、地域の食材を再発見してその価値を再認識するとともに、恒久的な普及に繋げるものである。1年ごとに新しいテーマで食材を発掘する。



静岡ガスグループとの長期包括連携協定の締結

地域内外の各種団体との連携

包括的な連携協定である応援会員制度のほか、個別の目的を持ったパートナーシップも存在している。

○東海自動車株式会社による保全・研究基金への継続的な支援

同社と推進協議会は一年間に出荷する柑橘リカーの売上から、1本につき10円を寄付する、協議会は商品などにロゴマークを使用することを許可するとの協定を締結している。寄付金は「保全・研究基金」に繰り入れられ、学術助成の原資となっている。



○伊豆の海ジオのあそびかた

2019年に発足した、ダイビング・シュノーケリング・カヤック・SUP・海辺のトレイルなど海を中心としたアクティビティを提供する事業者の集まり。伊豆半島ジオガイド協会、伊豆半島ジオマリンクラブ（準ジオガイド団体）、ジオテラス伊東が中心となって活動を行い、海のアクティビティを通して、海の中のジオを再発見する試みである。推進協議会では共同してワークショップを行って、ポスターとリーフレットを作成した。（E.1.5で詳述）

○自然史博物館との連携

各地域の自然史博物館は各館のテーマに応じたファンがいる。そうした博物館どうしが連携することで、自然科学に興味を持つ層に対して効率よく訴求できる。2019年には以下の2館と連携し、ジオリア所有の標本や展示物、映像などの貸し出しや研究員の講座、巡検を実施した。

連携博物館等	企画名	期間	連携内容
ふじのくに地球環境史ミュージアム	超絶！凌駕！伊豆半島の大自然	2019年6月15日～8月25日	映像・パネルの貸出 研究員によるミュージアムトーク バス巡検案内（4回）
月光天文台	地球史でたどる伊豆半島	2019年3月1日～5月31日	映像の貸出

E.7.3 地元コミュニティや先住民族の全面的かつ効果的な参加

○鉢窪山ジオサイトの開発

2018年の世界ジオパーク認定をきっかけに、鉢窪山ジオサイトの地域コミュニティで「はちくぼ会」を結成、ジオサイトの勉強会や現地見学を行った。この結果、コミュニティの意向として鉢窪山に多くの人が訪問して欲しいとの希望に至り、山頂への登山道を協働で開削した。山頂には富士山を望む展望デッキを設置、地域のライオンズクラブとの共同でジオサイトの解説板も新設した。さらに研究拠点「あまじお」を拠点とする静岡大学の生物教員が森林のワークショップを開催、その成果として登山道沿いの立ち木に樹名板を設置した。登山道はコミュニティによってメンテナンスが行われ、推進協議会も協力している。



地域コミュニティによる登山道の開削と展望台の設置

○行政や地域住民によるサイトのメンテナンス

各サイトやそこに至る遊歩道などは、管理者による清掃や除草が行われている。加えて、ジオガイド団体による遊歩道のパトロールや清掃イベントによって実質的な保全が達成されている。西伊豆町一色にある伊豆半島最古の地層では、サイトの近隣の松崎高校が教員や高校生、地元町内会によって露頭の保全、清掃活動が継続されている。



伊豆半島最古の地質露頭における高校生と住民による保全

○ジオパーク活動への障がい者の参画

ジオパーク推進協議会、ジオガイド協会ではジオパーク活動に参画している目印として、ジオパークのロゴを刺繍したポロシャツを着用するようにして、視認性の向上を意図している。発展途上国での障がい者の社会参画を参考に、ポロシャツへのロゴ刺繍を障がい者の授産施設に委託することにした。このことでジオパークの活動を障がい者へ還元するだけでなく、すべての地域住民によるジオパーク参画を意図した。海外からの視察の際も訪問して、障がい者に地域だけでなく世界の一員である気がつきの機会にできた。シャツのほか、タオル等のお土産物の刺繍も委託している。



障がい者による姉妹ジオパークロゴ刺繍品の制作

E.8 ネットワーク活動

国際会議への参加

2017年からの3年間で、第8回 GGN 国際会議および第5回、第6回 APGN シンポジウムに参加。ここでは伊豆半島での取り組み事例を発表し、実践例を共有したり、ジオパークとしての研究報告を行ったりしている。その中で、第8回 GGN 国際会議（イタリア、アダメロブレント）においてジオパーク推進協議会会長（伊豆市長）が講演。地質遺産の保全を意図したが結果的に景観を破壊し、ジオサイトに認定できなかった事例を責任者の立場から自戒を込めて報告。失敗事例を共有する姿勢に高い評価が集まった。このほかシンポジウムでは質疑に積極的に関与、実質を伴う国際交流を実施している。



菊地会長による GGN 大会での講演

また2017年にはユネスコ主催のレスボス集中研修に研究員を派遣、ユネスコ/GGN 諮問委員らとも積極的に意見交換を行って理念を持ち帰り伊豆半島内で共有したほか、伊豆半島での実践例をジオパーク準備地域へ紹介し、交流の端緒となった。

他のユネスコ世界ジオパークとの連携、交流

静岡県と姉妹提携を持つインドネシア、西ジャワ州には伊豆半島と同時にユネスコ世界ジオパークに認定されたチレトゥーパラブハンラトジオパークがある。県一州での高レベル交流の際に伊豆半島ジオパークを訪問され、両ジオパーク間の交流が始まった。先方州政府職員による2週間の滞在でのユネスコ世界ジオパーク研修、その後伊豆半島から先方ジオパークを公式に訪問、フィードバックを行った。この後も先方ジオパークの運営者を技術研修で招へい、インドネシアで実装できることを主眼に置いた解説板、電子地図の作製、サイトの保全にかかる技術移転を実施した。資料を交換して相互のミュージアムで展示。2019年には両ジオパーク間で協力に関する覚書きを交わした。



静岡県庁での協力覚書の締結

このほかでは、香港ジオパークの1週間に及ぶ教育旅行を受け入れ、この際海外からの教育旅行のパッケージ化を図り継続的に行えるよう努めている。また中国、天柱山ジオパークおよびドイツ、ベルクシュトラーセ・オーデンワルドジオパークのリーフレットの日本語翻訳を引き受けた。

アジア地域へのジオパーク普及活動

ユネスコジャカルタ事務所、隠岐ユネスコ世界ジオパーク、日本ジオパークネットワーク主催、アジア太平洋地域のユネスコ担当職員向けのジオパーク研修において、ジオパークでの教育への実践について講師を派遣した。また複数の機会においてネパールでジオパークに関心のある官吏・大学教員に対して、ジオパーク概念の導入やジオサイト保全の具体的な方法の技術移転を実施し、ジオパーク未実装地域への普及啓発に貢献している。また韓国のジオパーク準備地域へジオガイドを派遣し、ジオガイド実践事例の紹介を行った。様々な機会を利用して、普及啓発、技術移転を実践している。

E.9 地質鉱物資源の販売

協議会構成団体による鉱物資源の採掘や販売は行われていない。

F. 結論

伊豆半島は2011年にジオパーク活動を開始して以来、ジオツーリズムを推進し、来訪者へ伊豆半島のなりたちと魅力を紹介するためジオガイドを養成し、解説板を設置し、拠点施設を整備してきた。また学校でのジオ教育や地域での活動をおし郷土愛を育み、自らが住まう唯一の土地：伊豆半島を知り、持続可能な地域を目指しました。2018年、ユネスコが認証する「ユネスコ世界ジオパーク」になりました。伊豆半島に暮らす人々は伊豆が持つ世界的な価値を認識し、地域に対する誇りを醸成した。

2017年からの3年間でジオパークの活動はさらに深まりました。顕著なのは学校におけるジオ学習の広がりです。フィールドワークで地域を観察し、伊豆半島のなりたちの学習によって地域に対する理解が進んだ。波及効果として防災に対する意識も高まった。ジオツーリズムでは、従来の地質中心のツアーから、多様な自然環境や文化、芸術へと活動の幅は広がりました。予約なしで参加できるジオツアーが各地で行われ、ジオパークの新たな顧客の掘り起こしを成し、ジオパークの魅力を広める役割を果たした。このほか、ユネスコ世界ジオパークのネットワーク活動に積極的、多面的に貢献してきたほか、海外からの来訪者によって住民が地域への誇りや再発見を行う相乗効果ももたらした。成果の1つは、「ジオパーク」という言葉が伊豆半島を包摂する前向きなイメージとして定着したことである。

伊豆半島は既に人口減少社会に入っている。ジオパーク活動を通してSDGsを実践し、ビジョンを共有する企業や個人とパートナーシップでともに手を携え、持続可能な社会の実現をこれからも目指していきます。